

# ラレテアル文の構文的な特徴とその意味・用法について

ユウ ウンスタ  
高 恩淑 (獨協大学)

## 1. はじめに

「動詞の受身形+テアル」という形式 (以下、ラレテアル文) は、対象となる主語の状態を描写する結果相を表すという点で「他動詞+テアル」形 (以下、テアル文) と類似しているが、非文とされることが多かったため研究対象として取り上げられることは少なかった。しかし、事例が少なからず存在している点を考慮すると、どのような構文的な条件のもとでラレテアル文が成立するかを把握しておく必要がある。本発表では、事例をもとにラレテアル文の構文的な特徴を探ると共に、その意味・用法も合わせて明らかにしたい。

## 2. 先行文献におけるラレテアル文の概要

まず、意味的に類似するラレテアル文と関連付けて取り上げている先行研究を見ていきたい。寺村 (1984: 147-152) は、意味的な側面からテアル文を「眼前の状態を描写する場合」と「現在の状況を述べる場合」に分けている。前者は「ある目的のための準備という意味合いはない場合が多い」が、後者は「あることに対する準備という意図であるもの」という意味合いが強くなる」と述べている。ラレテアル文については、理屈から成立しないと指摘しながらも、「実際には小説などでわりによく見かける」とし、意味的には「他動詞受身形+テアル」形 (以下、ラレテアル文) とほとんど同じであると記述している。また、寺村はラレテアル文に、テアル文がもつ意図的な処置の既然の結果という性質はないと捉えているが、今回の調査結果を見ると、ラレテアル文にはテアル文のように動作主の意図のもとで行われた行為の結果を表す例文が少なくなかった。

(1) 二月十四日、いつもは処方箋や検査伝票やメモが入れてあるコップ大のケースに赤い包みが入れられてあった。ひとりひとりのドクターに短いメッセージが書いてあるチョコレートだった。(LB04\_00044 BCCWJ)

(2) そのシステムでちょっと問題点になると思われるのがやはりそのHTMLなどで書かれたえー教材っていうのはえー皆が見れるように書かれてあるのでできる人もできない人も同じような内容を見なければいけない (後略) (A04M0392 CSJ)

一方、益岡 (1987) は、統語的観点からテアル文を「A 型: (対象) ガ ~テアル (受動型)」と「B 型: (動作主) ガ (対象) ヲ ~テアル (能動型)」に大別した上で、各類型をさらに二つに分類している (A<sub>1</sub>、A<sub>2</sub>: B<sub>1</sub>、B<sub>2</sub>)。益岡は、テアル文の中でラレテアル文が出現できるのは、広義の存在表現の一種とされる A<sub>1</sub> 型 (配置動詞) に限られるとし、これはテ形に接続するアルが存在動詞の性格を強く反映することに起因すると述べている ((3)、(4)は益岡 1987 の例文)。

(3) 菊代の家には、タンスや三面鏡や電気洗濯機、冷蔵庫、蓄音機などが相変わらず

置かれてあった。(松本清張「鬼畜」)

(4) 額にはいった四人の写真が飾られてあった。(石井代蔵「天下盗り狼」)

従来の研究において、ラレテアル文に焦点を当てた研究がほとんど行われていなかった中で、森(2001)はラレテアル文の使用実態を調査している点で意義がある。森は、益岡(1987)のテアル文の分類(A<sub>1</sub>、A<sub>2</sub>:B<sub>1</sub>、B<sub>2</sub>)に従い、ラレテアル文の実例を分類し、「～テアル」の「アル」が存在の意義を反映していると解釈される場合、A<sub>1</sub>型に限らず、A<sub>2</sub>型、B<sub>1</sub>型、B<sub>2</sub>型にもラレテアル文が許容されると主張している。

しかし、益岡(1987)のテアル文の分類をラレテアル文にそのまま適用し、分類することには無理がある。また、ラレテアル文の成立条件を単に「アル」が「存在」として解釈できるか否かを基準とする考えは明確な基準とは言い難い。そもそもテ形に接続する存在動詞「アル」の意義は文によって反映する度合いが異なるだけで、テアル文であれ、ラレテアル文であれ、「アル」の意義は存在し、ある対象の状態を言い表す結果相を表すと考えられるからである。

一方、斐(2018)は、テアル文とラレテアル文との関連性を論じていて、「可視性の制限」によってラレテアル文をA、B、Cに分類し、目に見えない形で存続していることを描写するタイプの文(C)は、テアル文に存在しないと主張している。しかし、杉村(1996)の「情景描写文」にも見られるように、テアル文には次のように視覚以外の感覚によって捉えられるものもある((5)、(6)は杉村1996の例文)。

(5) イチローの部屋はいつもクラシックがかけてある。(聴覚)

(6) イカサマ神殿にはえも言われぬ雰囲気が漂わせてある。(心)

韓(2024)も、斐(2018)の主張(目に見えない形で存続していることを描写するCタイプの文は、テアル文に存在しないという考え)を全面的に否定し、テアル文に可視性という制限はないと指摘している。韓(2024)は、テアル文との距離を基準とし、ラレテアル文を「存在文」と「準備文」に大別しているが、その分類基準には検討の余地がある。また、韓は「存在文」を「単純存在文」と「動作主前面化存在文」に分けているが、「動作主前面化存在文」と「準備文」の違いについては言及していない。

これまでの先行研究から共通して言えるのは、ラレテアル文はある対象の状態を言い表す結果相で、用法によってはテアル文、またはラレテイル文に近い性格を有するということである。

従来の研究において、結果相を表すテアル文(「他動詞+テアル」形)、テイル文(「自動詞+テイル」形)、ラレテイル文(「他動詞受身形+テイル」形)に関する研究は数多く行われてきたが、ラレテアル文に焦点を当てた研究は数が少ない。本発表では先行研究を踏まえながら、ラレテアル文の使用実態を調査し、その構文的な特徴および意味・用法について考察を試みたい。

調査対象には、現代日本語書き言葉均衡コーパス(以下、BCCWJ)と、日本語話し言葉コーパス(以下、CSJ)、日本語日常会話コーパス(以下、CEJC)を用いる。例文は、文字列検索([あ-ん]れてあ[りるっ])を行い、BCCWJでは612例を抽出し、CSJでは42例、

CEJC では 5 例を抽出した。以下では、その調査結果を中心に見ていくことにする。

### 3. ラレテアル文の構文的な特徴

#### 3.1 ラレテアル文の動詞構成

テアル文に用いられる動詞は、基本的に他動詞や自動詞の意志動詞である<sup>1</sup>が、ラレテアル文の場合は意志性のある自動詞であっても、「寝られてある」「動かされてある」「通われてある」のような使い方はできない。

(7) ここ数日、十分に休んである／寝てあるから一日残業ぐらい平気だよ。

(8) \*<sup>2</sup>ここ数日、十分に休まれてある／寝られてあるから一日残業ぐらい平気だよ。

ラレテアル文の動詞のほとんどは他動詞の意志動詞で、659 例のうち無意志動詞は他動詞の「忘れる」「書き忘れる」と自動詞の「熟成する」のみである。他動詞と言っても動作性の強い典型的な意志動詞（「食べる、飲む、見る、聞く、読む、する、殺す、殴る、蹴る、倒す、など」）ではなく、出現動詞「書く、記す、描く、示す、刻む、したためる、掘る、揚げる、作る、用意する、記載する、など」（総 659 例のうち約 5 割）や、配置動詞「置く、貼る、敷く、並べる、掛ける、飾る、積む、付ける、つなぐ、隠す、入れる、しまう、困む、設置する、安置する、など」（約 3 割）が多い。他に、状態変化動詞「切る、潰す、染める、薄める、磨く、畳む、など」や状態存続動詞「備える、挙げる、残す、押す、吊るす、選ぶ、展示する、保管する、保存する、予約する、など」、処置動詞「施す、任せる、言う、考える、まとめる、指示する、説明する、など」が見られる。

吉田（2012）は、書記動詞と作業動詞には何段階も動作の積み重ねがあり、その過程性がラレテアル文を不自然に感じさせると主張しているが、今回の調査では 659 例のうち 4 割近い書記動詞と作業動詞の例が見られた。特に書記動詞の場合、単に眼前描写を表す文が多く、そこからは動作の積み重ねや動作主の意図などは読み取れなかった。

(9) ある年の元旦の日記には、神々や祖先の霊を祀ったことが記されてあるが、そこにはほかのいくつかの神の名と並んで（後略）。（PB12\_00160 BCCWJ）

(10) でまーちなみにあのこの本の中で何が書かれてあったかということ簡単に触れときますと。（S08M0683 CSJ）

一方、主語はガ格で表される物名詞がほとんどで、人名詞は 659 例のうちわずか 7 例（「彼が選ばれてある」「行者が祀られてある」「母と父とが合葬されてある」など）に過ぎず、抽象名詞を含めても 1 割に満たない。また、文の構造は基本的に益岡（1987）の A 型（（対象）ガ ～テアル）のように、対象となる名詞が主語となる受動構造をとっている。全用例の約 8 割を占めている出現動詞や配置動詞は、位置を表す句や節を伴う文がほとんどで、約 8 割以上の文が「（～ガ） ～（場所）ニ ラレテアル」、「（～ガ） ～（場

<sup>1</sup> 益岡（1987）は、自動詞が用いられるラレテアル文は B2 型（行為指向性が最も強く、行為の結果が基準時において有効性を示す）に限られるとしている。

<sup>2</sup> 非文法的な文の場合（統語レベルで不適格）「\*」、非文法的ではないが文脈から不自然な場合「#」（テキストレベルで不適格）を、該当文の前に付け加える。

所)ニ ～ト ラレテアル」、「(～ガ) ～(場所)ニ ～(方法)デ ラレテアル」といった構文をとっている。また、他の動詞においても二格との共起が著しいことから、補助動詞「-テアル」における存在動詞「アル」の影響が考えられる。

### 3.2 存在動詞「アル」との関係

上述したように益岡(1987)は、ラレテアル文が出現できるのはA1型(配置動詞)に限られると指摘している。この点について、益岡は「A1型が広義の存在表現の一種であり、この型において、テ形に接続するアルが存在動詞のアルの有する「存在」の意義を強く反映している、ということと関係がある」(p.232)と論じている。また、テ形に接続する「アル」の意義が存在動詞「アル」の意義を反映する度合いは、A1型において最も高く、B2型において最も低いと記述している。これはラレテアル文にも当てはまる指摘で、ラレテアル文においてもテアル文のように存在動詞「アル」の影響に度合いが見られる。次の例文のように、単に話し手の眼前の情景を描写するラレテアル文(「存在描写文」の「眼前描写」)は、存在表現に近い性質を有すると考えられる。

(11) 工場は運河に沿って建てられた平家作りのそう大きくない構えで、とある官庁に附属することが入口の標札に書かれてあった。(PB29\_00654 BCCWJ)

(12) カーマの岩山基地で、私は五日間過ごした。基地は、石積みの壁で囲んだ小さな岩室で、床に枯草が敷かれてあった。(PB12\_00067 BCCWJ)

これらは存在動詞「アル」の意味が強く影響している文で対象の視覚化が強く、動作主の存在は特に意識されない。

一方、同じ動詞であっても動作主の意図やその存在が前面に現れる場合は、次のように動作主の意志的な行為の結果が存続している状態(「行為結果描写文」)を表す。

(13) 僕の書いた打合せの手紙を、セリナは一瞬のうちにドイツのエッセン市へ運び、すぐに先生の返事を貰って来てくれた。先生の手紙には、こう書かれてあった。  
(LBb9\_00116 BCCWJ)

(14) 桐の木の下に座を構えておられますが、ただ子の場合は、誰かが、どこからか探し出して来たらしい、一枚の毛皮様のものが、子のために敷かれてありました。  
(OB3X\_00163 BCCWJ)

以上の点から考えると、ラレテアル文の意味は述語動詞の有する意味だけに依存するのではなく、動作主の存在が意識されるか否か、また結果存続の状態が動作主の意図のもとで行われた行為の結果であるか否かも重要要素の一つであると言えよう。この点については、4節で詳しくみていくことにする。

### 3.3 ラレテアル文の性質

テアル文は、通常意志的行為の結果もたらされる状態を表す表現であるとされるが、ラレテアル文は無意志的な行為や自然情景を表す例文も少なからず存在する。今回の調査では10例にとどまっているため一般化はできないが、ラレテアル文の方がテアル文より状態

性が強いと言えるかもしれない。

(15) 千九百七十年前後の小説雑誌は、東海道新幹線の一つの車両に一、二冊は置き忘  
れられてあるといわれたぐらいによく売っていた。(PB19\_00034 BCCWJ)

(16) それでも、愛と享樂への資質に恵まれてありさえすれば、五年間に一度や二度は  
優勝してしまうのが、ベースボールというものなのだ。(LB17\_00071 BCCWJ)

(17) ハルシュタット湖は、ザルツブルグ市とグラーツ市とを結ぶ線上、ザルツブルグ  
市から東南約五十km、高い山にかこまれてあるのです。(LBa4\_00002 BCCWJ)

これらはテアル文への置き換えはできないが、ラレテイル文（「他動詞受身形+テイル」  
構文）に置き換えが可能で受身文に近い性質を有すると考えられる。

一方、上述したようにラレテアル文は通常ガ格をとり、対象となる名詞が主語として用い  
られる受動構造をとるが、次のようにヲ格をとる構文も見られる。わずか5例ではあるが、  
これらは益岡（1987）のB型（動作主）ガ（対象）ヲ～テアル）の構文特徴を持ってい  
て、テアル文に置き換えることが可能である。

(18) あなたの所に初めて遊びに行った時、ゴミ箱から溢れるほどくしゃくしゃに丸め  
られた便箋には「君は、君は、君は…」とだけ、その一言だけ<sup>を</sup>何度も何度も書  
き潰されてありました。(PB19\_00302 BCCWJ)

(19) （ランディング・サイトは：筆者注）ともかく抽象に先立ち、ごくわずかの干渉  
で流動するもの<sup>を</sup>、配置されてあるかのように見せ掛けるよう、デザインされた  
ものなのです。(PB45\_00064 BCCWJ)

このように、ラレテアル文はテアル文と違って、ラレテイル文のように無意志的な行為  
や自然情景を表す場合もあれば、テアル文のように動作主の意図的な行為の結果を表す場  
合もある。こういった点から考えるとラレテアル文はテアル文とラレテイル文の性質を両  
方あわせ持っていると思えられそう。また、ラレテアル文にはよりテアル文に近い性質  
を有するタイプと、ラレテイル文のようにより受身に近い性質を有するタイプが存在する  
ことが考えられる<sup>3</sup>。

#### 4. ラレテアル文の類型 —動作主の意図の有無による分類

テアル文の意味を論じる際、「準備」や「有効性」、「意図性」という用語がよく用いら  
れる（寺村 1984、益岡 1987、杉村 1996、吉田 2012 など）が、いずれも動作主の行為の結  
果が何らかの形で影響を与えているという意味を表すという点で共通している。杉村  
（1996）は、益岡（1987）のテアル文の分類（「A<sub>1</sub>、A<sub>2</sub>：（対象）ガ～テアル」と「B<sub>1</sub>、  
B<sub>2</sub>：（動作主）ガ（対象）ヲ～テアル」）を取り上げ、「が格の性質」による分類と「意  
図性」による分類は異なると指摘している。杉村（1996：77）によると、「意図性」の観点  
からすると、A<sub>1</sub>、A<sub>2</sub>、B<sub>1</sub>の場合、話し手の関心は「対象の状態存続」にあるため、その

<sup>3</sup> 吉田（2012）は、ラレテアル文を直接受身文のテアル文と捉えている。また、ラレテアル文  
は、テアル文のように動作結果存続を表す「現存文」を表し、対象の存在が前面化される場合  
は「準備」を表す「意図達成文」を表し得ると述べている。

状態が何らかの目的のために作り出されたのかということは二次的な問題であるが、B<sub>2</sub>は話し手の関心が「行為の結果の有効性」にあるため意図性は一次的な問題になると論じている。この点について益岡（1987）は、B<sub>2</sub>型は行為指向性が強い表現で、「テアル表現に関してよく指摘される「準備」等の含意は B<sub>2</sub>型にもっとも顕著に認められるようである」（p.235）と記述している。

ラレテアル文もテアル文のように、対象となる主語の状態を描写する結果相を表すが、その状態の存続が動作主の意図を問題にしているか否かによって大きく二つに分けられる。次の例文（20）は、動作主の意図は不問で単に目の前に対象が置かれている状態を描写している「存在描写文」であるのに対し、例文（21）は動作主の意図のもとで行われた行為の結果状態を描写している「行為結果描写文」である。

(20) この版画作品の左下には「ふるさと 大道」の文字が刻まれてあった。

(PB32\_00156 BCCWJ)

(21) 空石の金庫は、それ自体が空石を加工したもので作られていて、池のすぐ上に静止浮遊してるわ。でも、嚴重な魔力調整が施されてあるせいで、少しでも余計な重みがかかると下に沈んじゃうし（後略）。(LBp9\_00057 BCCWJ)

以下では、このようなラレテアル文の「存在描写文」と「行為結果描写文」の構文的な特徴に注目し、その意味・用法について考察する。

#### 4.1 「存在描写文」の意味・用法

「存在描写文」は、動作主の存在は特に意識されず、動作主の意図も読み取れない文で、単に対象となる主語の状態を描写する結果相を表す。このタイプの文には、話し手の目の前にある対象の状態を表す「眼前描写文」と、目には見えないが存在するとされる抽象的な対象の状態を表す「非眼前描写文」がある。「眼前描写文」は眼前の現象をそのまま描写する時に用いられる文で、対象の視覚化が強く、動作主の存在は前面にあらわれない。基本的に物主語で場所二格句を必要とし、出現動詞や配置動詞に偏って見られる。存在表現に近い文でラレル文やラレテイル文に置き換えることができる。

(22) 祭壇の上には、なにやら妖しい香りをたてる香炉やら剣やら、得体の知れない道具が置かれてある。(LBd9\_00183 BCCWJ)

(23) 定期購読している経済雑誌が数冊、書斎のソファの前のテーブルに積まれてある。(PB49\_00499 BCCWJ)

(24) 雑誌か何かの記事でえー私はたまたま読んでありますけれども。アメリカのボストンの黄葉黄葉って黄葉ですね。黄色の葉の素晴らしさは日本の比ではないという記事が書かれてありました。(S10M0727 CSJ)

一方、次のように「非眼前描写文」の対象となる主語は抽象名詞で、名詞を修飾する連体形の構文が多く、書き言葉に偏って見られる。

(25) 死とは日常と切り離されてあるものではなく、その延長としてあるものだと思う。

(LBp7\_00058 BCCWJ)

(26) それぞれの時代に、また、それぞれの地域に、性にまつわる固有の民俗が當まれてあったことを認めることなしには、真澄の残してくれたドキュメント＝記録に向かい合うことはできない。(PB12\_00160 BCCWJ)

(27) いま与えられてあるものだけで感謝して満足する、足ることを知る、そのほうが人間らしいのではないか。(OB5X\_00190 BCCWJ)

「非眼前描写文」は、意味的に受身表現に近い文で、通常ラレテイル文で表現されるが、あえて補助動詞「-テアル」をつけることで存在動詞「アル」の意味が反映されることになり、さらにその状態性が強まると考えられる。このタイプの文は、そもそも動作主の存在自体が不問で、単にある対象の存在を表す文のため、動作主の行為の結果を前提とする「眼前描写文」とは異なり、テアル形に置き換えることができない。

#### 4.2 「行為結果描写文」の意味・用法

「行為結果描写文」は、動作主が行った行為の結果に重点が置かれる表現で、動作主の意図が明らかに表れる文である。対象の視覚化の有無は問題にならず、動作主が意図して行った結果が存続する状態を表す。文中では、動作主の目的を表す表現「するために、するように」や、準備過程を表す副詞成分「こまごまと、綿密に、きちんと、隈なく、何度も、執拗に」などの共起が目立つ。述語動詞は、状態存続動詞（「備える、挙げる、残す、押す、吊るす、選ぶ、展示する、保管する、保存する、予約する、など」）や処置動詞（「施す、任せる、言う、考える、まとめる、指示する、説明する」）が多いが、出現動詞、配置動詞なども使われている。

(28) 左に後衛駆逐艦二隻の三列縦陣をくんでいた艦隊は、また単縦陣をとり、邀撃態勢を完全にととのえた。作戦も数々の夜戦の経験にもとづき、綿密にたてられてあった。(LBF9\_00166 BCCWJ)

(29) 彼は巨大な図体を持ち黒い千貫の重量を持つ。彼の身体の各部はことごとく測定されてあり彼の導管と車輪と無数のねじとは隈なく磨かれてある。

(LBi1\_00017 BCCWJ)

(30) 板橋区にはん中山道という大きな街道が通っております。本によりますと、板橋区というものを知る為に中山道という街道がとても重要なことが書かれてありました。(S09F1379 CSJ)

このように、「行為結果描写文」は動作主の目的や意図が顕著に表れる表現で、動作主の存在が前面化される。ある目的のための「事前準備」として行われる動作の結果状態を表すことから、能動的な性質を持つテアル文には置き換えることができるが、受身文のラレテイル文には置き換えることが難しい。

#### 5. おわりに

本発表では、実例をもとにラレテイル文の構文的な特徴を明らかにすると共に、その意味・用法について考察を行った。その内容を簡単にまとめると、次のようになる。

- ① ラレテアル文の動詞は基本的に他動詞の意志動詞で、出現動詞と配置動詞に偏っており（全用例 659 件のうち約 8 割）、そのほとんどが位置を表す句や節を伴う。
- ② ニ格との共起が著しいことから、補助動詞「-テアル」における存在動詞「アル」の影響が大きいと考えられる。
- ③ 文の構造は、基本的に対象となる名詞が主語となる受動構造（「(対象) ガ ～ラレテアル」）で、主語は物名詞が約 9 割を示す。
- ④ ラレテアル文の意味は、述語動詞の有する意味に依存するところが大きいですが、動作主の存在が意識されるか否か、また結果存続の状態が動作主の意図のもとで行われた行為の結果であるか否かも決め手の一つと言える。
- ⑤ ラレテアル文は、動作主の意図の有無によって「存在描写文」と「行為結果描写文」に大別される。
- ⑥ 「存在描写文」は可視化の有無で、さらに「眼前描写文」と「非眼前描写文」に分けられるが、「非眼前描写文」は基本的に動作主の存在自体が不問であるためテアル形に置き換えることができない。
- ⑦ 「行為結果描写文」は、動作主の目的や意図が顕著に表れる文で「事前準備」といった意味合いを表すため、ラレテアル文に置き換えることができない。
- ⑧ ラレテアル文は、テアル文とラレテイル文の性質を両方あわせ持っていて、存在表現に近い性質を有するタイプ（「眼前描写文」）とラレテイル文のようにより受身表現に近い性質を有するタイプ（「非眼前描写文」）、能動的な性質を持つテアル文に近い性質を有するタイプ（「行為動作描写文」）が存在する。

今回の調査では、「非眼前描写文」が書き言葉に偏って見られること以外は、書き言葉と話し言葉において出現する動詞や構文上の特徴に有意差はなかった。ただ、ラレテアル文が話し言葉より書き言葉に多く用いられる傾向があることは確かである。

#### 【参考文献】

- 韓濟蓬（2024）「動詞の受動形+テアル」構文についての一考察『東アジア文化研究』（9）pp.221-235、國學院大學大学院文学研究科。
- 杉村泰（1996）「テアル構文の意味分析—その「意図性」の観点から—」『名古屋大学人文科学研究』（25）pp.73-96.
- 寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版。
- 裴銀貞（2018）「結果を表す「受動動詞+テアル」構文の出現様相の分析」『日本近代学研究』（60）pp.7-26、韓国日本近代学会。
- 益岡隆志（1987）『命題の文法』くろしお出版。
- 森貞（2001）「他動詞受動形+テアル」構文について『福井工業高等専門学校研究紀要《人文・社会科学編》』（35）pp.21-26、福井工業高等専門学校。
- 吉田妙子（2012）「第 4 章 テアルとテイルの相互交渉と「受身形+テアル」構文の出現条件」『日本語動詞テ形のアスペクト』pp.135-159、晃洋書房。